

第8回 鮎川哲也賞受賞作

木明の悪夢

谷 健 Kenji Kodama

東京創元社

第8回 鮎川哲也賞受賞作

未明の悪夢

工業学院図書館
藏书章

二 健 牙
Kenji Kodama

東京創元社

未明の悪夢 みめいのあくむ

1997年10月9日 初版

1998年1月20日 4版

著 者 **笹 健 二** こだま けんじ

発行所 **株式会社 東京創元社**

代表者 **戸 川 安 宣**

162-0814/東京都新宿区新小川町1-5

電話 03-3268-8231 (代表)

振替 00160-9-1565

製 版 **フォレスト**

印 刷 **恵友社**

製 本 **鈴木製本**

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Kenji Kodama 1997 Printed in Japan

ISBN4-488-02353-3 C0093

目次

I	それまで	5
II	そのとき	96
III	それから	208

第八回 鮎川哲也賞選考経過
選評 島田莊司 有栖川有栖 352

綾辻行人

354

未明の悪夢

装 幀 京極夏彦
本文図版 濱中利信

I それまで

振り返ると、海が見えた。

有希^{ゆうき}真^{しん}一^{いち}は、四月末のすでに暑いくらいの陽射しの中、額に薄く滲んだ汗を、手の甲で拭った。肩に喰い込んだ、教科書が目一杯詰まった肩掛け鞆のベルトを直そうと手をかけた時、遠くから船の汽笛が重く大気を震わせながら有希の耳に届いた。

長い登り坂の頂きからは、眼下に広がる瀬戸内海と、その右方に位置する淡路^{あわじ}島、そして、光る波間を大小の船が行き来する明石海峡^{あかし}が、一望の下に見渡せる。午下^{ひるご}がりのこの時刻には、学校帰りの有希のほか、坂道には目の届く限り人の姿もない。有希はそのまましばらく立ち止まって、少し乱れていた呼吸を整えた。

どこからか、誰かの弾^ひくピアノのゆったりした旋律が聞こえてくる。それほどに辺りは静かだった。視線を左方に転ずると、緩やかに弧を描く大阪湾、そして、須磨^{すま}の鉢伏^{はちぶせ}山の頂上にある回転展望台までが視界に入った。濃緑の山と、その麓に広がる住宅地。

大きく息を吸い込んで、次に吐き出しながらふたたび海へと目を移す。そうして光の瞬く海面を見つめていると、有希の脳裏に、最近得た奇妙な認識が、今一度、頭をもたげた。

それは海に関する、こんなふうなものだった。「深海二万メートル」という言い方がある。世界で最も深いマリアナ海溝は、さらに深い深度を誇っているとも聞く。その途方もない深さ。強大な水圧。有

希はそれまで海というものは人知のとうてい及ばない厚みをもって、この地球を覆っている存在だと思つていた。

しかし「一万メートル」というから途轍もない距離に思えるが、「一万メートル」とはキロに直すとわずか十キロメートルでしかない。今、有希の立っている神戸市の西のはずれの垂水区たなろくから、市の中心部の三宮さんぐまでが、約十六キロメートル。各駅停車の電車で二十分ほどの距離だから、それよりはるかに短いことになる。実際は、垂水区から東へ十キロといえ、ちょうど長田区ながたのあたりだろう。

このことに気付いた時、有希は少なからぬショックを受けた。十キロという長さは地球の大きさと比較すると、小さな点のようなものだ。これは、無類の厚さをもつて、この星を包んでいたはずの海というものが、実際は惑星の表面に載ったごく薄い被膜のようなものに過ぎないということを意味していた。そう気付いてみると、同様のことは海と逆の高さという位相を持つ大気についても言えた。「高度一万メートル」というから気の遠くなるような高さに思えるのであつて、現実には大気圏というものもまた、ごく薄い膜として、この地球の周囲に漂っているに過ぎない。あるいはまた、地殻などというものも同じだ。これなどはわずか数十キロの厚さしかないのだから、文字どおり卵における殻のようなものだ。われわれ人類は、その脆く壊れ易い殻の上にながら、あたかもそれが確固たる不動の存在のように錯覚して暮らしているに過ぎないのだ。

ある日突然訪れたこれらの認識は、小学生の有希の、まだ柔らかい心の内を、しばらくの間、不条理な空虚さで満たした。それは自分の生というものが、かくも「薄っぺら」な状況によつて、半ば幸運に支えられるように成り立っていることへの、ある種のやりきれなさのようなものだった。

しかし、人は誰もこのような認識を永く抱えながら生きていくことはできない。人は、このような事実に至ったく気付かないで一生を終えるか、あるいは気付いたら、もう一度気付かないように意識の下

深く沈め去るか、どちらかだ。この時の有希は明らかに後者だった。

ところが、この日から約二十数年後のある日を境に、有希真一は沈め去ったはずの、この悪夢のような認識に、不斷にさいなまれることになった。それは一九四五年八月十五日以降に生まれた人間たちが、初めて投げ込まれた迷宮だったのかもしれない。

車のクラクションでふと我に返った有希は、坂道の下へと向かうその車体をやり過ごしてから、もう一度、海の方へ視線を投げた。淡路島の北の突端は、そこに点在する建物の色まで見てとれる。島と本土とを隔てる明石海峡が、幅約四キロ余りしかないからだ。——あその海は、ことさらに「薄い」とだろう——頭の片隅でそんなことを考えながら、有希は踵を返して、ふたたび家路を辿り始めた。

1945・3・17 2:05a.m.

日本標準時を定める東経一三五度の子午線が通る明石市から東へ約十二キロ進んだあたりは、現在、神戸市長田区と呼ばれている。

「ながた」の歴史は古い。文献上は『日本書紀』神功皇后じんこうこうごうの条にすでに「事代主尊ことしろぬしのみこと 誨えまつりて曰く、吾を御心長田国に祠まつれ」という一節が見られる。「ながた」の名は、その地を流れていた菰藻川かものも流域に沿って長く拓かれていた水田に由来するのだろうと言われているが、遠く弥生時代から、この川沿いに集落が発展してきたことは確かだろう。人々の暮しの跡を示す多くの生活土器が、長田神社の境内からは出土している。

しかし一九四五年当時、この地区はかつて美しい水田が広がっていたとはとうてい信じられないほど

の工業の町に変貌していた。明治の末には、後にこの地区の基幹産業となるゴム産業の先駆、日本イングラム護謄製造株式会社ができ、大正年間には大資本による造船所や鉄工業の工場が次々に新設された。そして第一次世界大戦による好景気が、これらの輸出製造業の発展を決定的なものにした。紡織工業、機械器具工業、化学工業、食品工業……。町には低収入の労働者たちがあふれた。彼らは大正七年に神港ゴム工業所が日本で初めて作った硫化ゴム靴の画期的な成功を機に大量に発生した零細なゴム靴業者の群れを支えていく基盤となる。

第二次大戦後、ゴム靴工業は素材をビニールやナイロン、塩ビレザー等に転換し、ケミカルシューズ産業として完成する。しかし、それはまた同時に、生ゴムの配給統制や企業整備等によって進化した分業下請制度の徹底した完成でもあった。下請けを行なうロール屋、打ち抜き屋、ミシン屋等は、いずれも町工場単位の零細企業で、ハイテクや大量生産とは対極に位置する、いわば家内制手工業の世界である。そうした内情は戦後は勿論、昭和を抜けて平成の世まで変わることなく続き、そして業界を支えた安価な労働力の中には、多くの韓国人たちが含まれていたのだった。

終戦の年、五歳だった倉田明夫の両親もまた、日韓併合後、日本海の向こうの半島からやってきた人たちだった。日本名を倉田衛伍、八重と名乗っていたが、勿論、本名ではない。韓国では一九一〇年代以降、日本の植民地政策としての土地調査事業によって多くの農民が土地を失い、さらに産米増殖計画により暮らしを圧迫された農民たちが、やむを得ず満州や日本に生活の糧を求めて流出した。半島の南部で農業を営んでいた倉田明夫の両親は、渡日後、初めの数年を大阪で土木労働者として過ごした後、神戸の長田区——当時は林田区と呼ばれていたが——でゴム靴工場の従業員としての職と、そして初めての子供、明夫を得ることになった。海を隔てた遠い異国の地での一人息子の誕生が、どれほどの喜びを両親にもたらしたか、後年、明夫はいやになるほど聞かされたが、明夫の内にある最も古い記憶は、

残念なことに、そうした両親の姿ではない。それは色——ただ赤く燃える炎の色だけである。

一九四五年三月十七日深夜、一機のB 29が神戸上空に侵入し、西から東へと数個の照明弾を投下した後、海上へ去った。神戸全域は真昼のように明るくなり、ほどなく米軍の爆撃機約七十機の編隊が飛来、翌朝五時に警戒警報が解除されるまでの間、大量の六ポンド油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、爆弾による無差別爆撃を行なった。死者二千五百六十八名。負傷八千五百五十八名。全・半壊家屋六万五千七百三十二棟。被災者二十三万六千六百六名。この空爆によって主に神戸の西半分が壊滅的打撃を受けた。

まだ三十代半ばだった若い両親に手を引かれて五歳の明夫は猛火の中を逃げ惑った。戦争末期の当時、健康な男たちは大部分、兵隊に取られていたが、明夫の父は入隊した部隊における訓練で胸の持病が悪化し、帰されていた。

真昼のように明るい夜空から豪雨に似た音とともに大量の焼夷弾が落ちてくる。細長い金属製の円筒形をしたそれは、落下後すぐに火を吹いて、町を焦熱地獄へ叩き込んだ。寝入りばなに飛び起きたのか、ろくに荷物も持っていない人。年老いた足許も覚束ない婦人の手を引いて、逃げることもできずに呆けたように空を見上げている若い女性。様々な人々が駆け回り、悲鳴と火の粉の飛び交う中、明夫たちは山手の方へと懸命に逃れた。その間、直撃した焼夷弾が体に突き刺さった人や、全身を火に包まれて、それでも母の名を叫びながら走る子供、千切れた手足、マネキン人形のような黒焦げの死体等、地獄のような光景を明夫は多く見た。どうか町を見降せる丘まで辿り着いた時、明夫自身の服も髪も、熱のために半ば焦げてしまっていたほどだった。

恐怖に耐え難い一夜が明けた後、町へ戻った明夫たち親子は、自分たちの住んでいた長屋が奇跡的に焼け残っているのを発見して驚いた。しかし周辺はどこまでも一面の焼け野原だった。未だに白煙のくすぶる瓦礫の中に、性別も分からない無数の焼死体が転がり、生き残った人々もまた、ただ呆然と立ち

尽くしたり、焼け跡を黙々と掘り返したり、あるいは放心したように歩き回ったりと、死者とさほどの差もなかった。

明夫の目には、何もかもが赤く見えた。五歳という年齢のせいもあったのだろうが、後年、この時のことを思い返すと、無残な遺体や、燃え上がる町や、交錯する悲鳴や、痛ましい光景は何か現実感の伴わない夢の中の出来事であったように感じられるのに対し、一夜明けた朝に見たこの焼け跡の光景だけは、その時の死臭の混じった空気の動きまで即座に思い出せるほど生々しい感覚をもって、明夫の内についてまでも残った。

すべてが赤い印象だった。それも、くすんだ煉瓦のような艶のない死んだ赤色。積み重なった瓦礫も、中途から折れて焼け残った電信柱も、そして炎に焙^{あぶ}られた砂と灰が広がる地面も、まるで世界が一晩で錆びついてしまったかのように、何もかもが赤い。そんな荒涼とした景色の中でわずかに見られる生の点景は、町の北側に横たわって伸びる六甲^{ろくが}の山並の樹々だけだった。すべてが焼き尽くされて、町は信じ難いほどの高熱に溶かされたというのに、それを包む自然だけは、前の日と何一つ変わらず穏やかだった。五歳の明夫には、それが何故かとても不思議に感じられて仕方なかった。

それから約三ヶ月後の一九四五年六月五日。神戸はふたたび大規模な空襲を受けた。飛来したB29は三百五十機。投下された焼夷弾約三千トン。死者三千百八十四名。空爆による死者発生率としては、全国最悪の数字を招いた。三月十七日の時とは違って、今度は早朝からの爆撃だったが、炎上する市街から立ち上る膨大な量の黒煙のため、陽光がさえぎられて夕暮れ時のようになり、その後、灰混じりの黒い雨が降った。この空襲で、燃え残っていた神戸の東半分、そして西の端にあたる須磨区も焼かれて、これで神戸の町はそのほぼ全域が廃墟と化した。明夫のいた林田区は、その中では比較的よく燃え残った方だった。

明夫たち親子は、今度はいち早く避難所になっていた小学校に逃げ込むことができた。だがそこで明夫は、前回にもましてひどい有様の重傷者が次々と運び込まれるのを目にすることになった。両のももから下を吹きとばされた人。全身に火傷を負い、赤黒く腫れ上がった体から滲んだ体液が大きく床を濡らしている人。異臭のたちこめる地獄のような惨状の中、見たところ、どこにも傷の見当たらない一人の若い女性の横たえられた光景が永く明夫の内に残ったのは、そのすぐ横に明夫と同じくらの年頃の小さな女の子が並んで寝かされていたからだだった。

二人は親子だったのだろう。まるで眠っているように穏やかに見えた。傷も火傷もどこにもない。本当にただ眠っているだけなのかもしれない——明夫は思わず女の子の方に腕を伸ばしかけて、その手を父に引き止められた。見上げた先の父の目を見て、初めて明夫には二人が眠っているのではないことを納得できた。その瞬間から、次の朝、教室の固い床の上で目覚めるまで、明夫は体の震えが止まらなかった。

それから約二ヶ月後の一九四五年八月十六日付け神戸新聞は「厳肅のうちに歴史的な大放送がしずかに巷を流れる。神戸戦災地では馬車もトラックも人もハタととまって声なく、脱帽して地に伏し、両の瞳には大つぶの涙湧汜として大地をぬらす」と、いわゆる玉音放送の模様を伝えている。

二十世紀の科学と物量の戦争を、十九世紀の竹槍や、火タタキや、バケツリレーで戦おうとした日本は、当然のように敗北した。そこに見られるのは軍事的強弱より以前に、それを動かしていた人々の圧倒的な意識のズレである。そして、そのズレの一部は、その後何十年間も省察の光を当てられることなく温存されていく。

一九四五年八月——

神戸は壊滅した。

1955・8・4 1:00a.m.

戦後、多くの在日韓国人たちが本国の政情不安や、財産の持ち出し禁止措置のため、日本に留まった。その中には、すでに生活の基盤が日本にできてしまい、帰国が困難になった人々もいたと伝えられている。倉田明夫の両親も、そのような人たちに含まれていたらしいが、明夫は詳しい事情を聞く機会をあまり持てなかった。というのも明夫の父は、息子が十五歳の時に結核で亡くなったからだ。長年、父親を苦しめ続けた胸の病は、父親を兵士としての戦死からは救ったが、最も多感な時期の一人息子から父親を奪っていったことになる。以後、明夫の母は心労のためか床に臥すことが多くなり、父親が戦後、長田で始めた大衆食堂は、自ずと明夫が継ぐ形となった。

明夫は戦後、在日韓国人たちの自主努力で始められた民族学校に入ったが、そこはすぐに日本政府によって制定された団体等規正令——ちょうど四十年後の日本で大きく取り沙汰されることになる破防法の元になったものだが——を理由に閉鎖されたため、日本人学校に収容された。以後、中学を出るまで明夫は、いわゆる民族教育を受けていない。韓国語も、だから片言しか喋れない。後年、このことが時として明夫を悩ませたが、当時は中学卒業とともに食堂のきりもりを始めねばならず、とても自分のアイデンティティーについて思いを巡らせている余裕はなかったのだった。

父親が息をひきとったのは、蒸し暑い夏の深夜のことだった。明夫は泣き続ける母と父の遺体を家に残したまま、一人で夜の町にさまよい出た。何故か涙も出ず、悲しくもなく、頭の中は漂白されたようにまっ白だった。明夫はそのまま木造住宅と零細なケミカルシューズの工場群がひしめく町を、南の方

へと歩いていった。

この約一年後「もはや戦後ではない」と経済白書が宣したように、十年前、戦災で亡んだ神戸も着実に復興した。長田には多くの復興住宅、市営住宅が建てられた。もつとも、市営住宅という言葉から、今日の鉄筋造りの箱物を連想されては誤解が生じるだろう。戦後すぐのこれらは皆、とにかく住環境を取り戻すためのもので、木造平屋、もしくは二階建て棟割り式の、悪く言えば長屋である。そして高度経済成長後は再開発から取り残されて、いわゆるインナーシティを形成していくことになる。

低い軒の連なる路地を抜け、国道二号線を横切つてさらに明夫は歩き続けた。やがて潮の香りがしてきて海に出た。明夫はぼんやりと岸壁に立ち尽くし、夜の町明りを反射している海面を見つめた。そうしていても、まだ涙は出てこない。代わりに浮かんできたのは、あの幼女の顔だった。昭和二十年六月五日。あの空襲の日避難先の小学校で見た女の子の遺体。子供の頃は、そんなことはなかったのに、年を経るにつれて明夫は時折り、奇妙な後悔に苛まれるようになった。あの時、五歳の明夫は思わず幼女の顔に手を伸ばしかけて、父に止められた。何故、父の制止を振り切つて、触れてみなかったのだろうか。そのまま思いきり揺さぶれば、あの子はぱつちりと目を開いて助かったのではないだろうか。全身全霊で体を揺すり、声をかければ、あの子は必ず目をあけたに違いない……。勿論、そんなことは馬鹿気た妄想に過ぎない。あの親子は死んで寝かされていたのだ。いくら揺さぶったからといって目を開くわけもない。にもかかわらず、時に後悔の念が明夫の胸をさいなんだ。あの時、触れてさえいれば、助けられたのにと……。

今しがたの父の顔も、まるで眠っているようだった。だから、こんなことを考えているのだろう。明夫は、そんな考えを拭い去るように両手で強く顔をこすった。

思いがけず両の掌が濡れて、初めて明夫は、いつの間にか自分が泣いていたことに気付いた。それか

ら随分長い間、明夫は岸壁に立ったまま、声を殺して泣き続けた。

1967・8・25 10:35p.m.

こわかったこと

二ねん二くみ
あかづきせいいち

ぼくのはがでっぱで、かみのけがちりちりのせいか、クラスのアキラくんのグループはやすみじかにぼくおよくたきます。からかわれてとてもくやしいけど、むこうがおおぜいなので、ぼくはなにもいえなくなってしまう。このごろはがっこうのそとでもひどいことをされてとてもしんどいです。

でもクラスのみきよちゃんだけはぼくのみかたです。いつもあきらくんにていこうしてたすけてくれます。みきよちゃんはこどもなおさいほうがとてもじょうずなので、ぼくはえらいなおもいます。